

美里町文化財調査報告書第6集

館ノ山遺跡
館ノ山館跡

平成22年3月

宮城県美里町教育委員会

館ノ山遺跡

館ノ山館跡

序 文

美里町では、町民の「生涯を通して健康で生きがいの感じられる心豊かな人生を送りたい」という願いに応えるため、生涯学習振興計画を策定し、生涯にわたって主体的に学び楽しむことができるまちづくりを目指しています。歴史・文化遺産については、文化遺産は町民のみならず国民共有の貴重な財産であり、次世代に継承していくことが現代に生きる私達の重要な責務であるとの考えに基づき、文化財保護行政を推進してまいりました。

しかし、一方では道路建設や大規模な宅地造成、ほ場整備などの各種事業も年を追うごとに増加しており、文化遺産が破壊され、消滅の危機に晒されることが多くなってきています。特に土地との結びつきが強い埋蔵文化財は、各種開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では広くその所在と重要性についての周知を徹底するとともに、開発とのかかわりが生じた場合には積極的に貴重な文化財の保護活用に努めております。

このたび調査の対象となった館ノ山遺跡・館ノ山館跡は、南郷地域における数少ない遺跡として知られていました。しかし国営鳴瀬川農業水利事業により遺跡が失われる可能性が非常に高まったことから、文化財の保存協議を重ねた結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。南郷地域での発掘調査は旧町時代を通じても初めてのことであり、南郷地域の歴史に新たな一頁を付け加えることとなったことは非常に喜ばしいことであります。これら成果を町内のみならず周辺地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

このたびの調査にあたりまして、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査の際に多大なるご協力を頂いた関係機関の方々、職員の派遣など絶大なるご指導、ご支援を賜りました宮城県教育庁文化財保護課の方々、さらに現地で地面も凍る吹雪の中での作業にご協力頂きました皆様に対し、厚く御礼申し上げます。ここに関係各位に対して謹んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願い申し上げます次第です。

平成22年3月

美里町教育委員会

教育長 高 橋 正

例 言

1. 本書は、国営鳴瀬川農業水利事業に伴う『館ノ山遺跡・館ノ山館跡』の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は美里町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、美里町教育委員会が担当した。
3. 発掘調査および本報告書の作成に当たっては、各関係者および以下の方々からご協力・ご教示をいただいた（敬称略）。

藤沼邦彦（元弘前大学教授） 村田晃一・柳澤和明（東北歴史博物館）

4. 測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。
5. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。
SI：住居跡 SB：建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 Pit：柱穴
6. 本書における土色の記述については、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
7. 土層の記述で使用した略称は以下の通りである。
地山粒（～1 cm未満） 地山小ブロック（1～3 cm） 地山ブロック（3～5 cm） 地山大ブロック（5 cm～）
8. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、岩淵竜也（美里町教育委員会）、小野章太郎（宮城県教育委員会）が執筆・編集した。
9. 発掘調査の記録や出土遺物は美里町教育委員会が一括して保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名：^{たての やま}館ノ山遺跡・^{たての やまたてあと}館ノ山館跡（宮城県遺跡地名表登録番号：40005・40003 遺跡記号：RU）

所 在 地：宮城県遠田郡美里町木間塚字古館

調査原因：国営鳴瀬川農業水利事業

調査主体：美里町教育委員会

調査担当：美里町教育委員会 岩淵竜也

宮城県教育庁文化財保護課 山田晃弘 山口 淳 小野章太郎

調査期間・調査面積

確認調査：平成20年10月20日～10月21日……………43㎡

事前調査：平成20年12月22日～平成21年1月23日……………350㎡

調査協力：東北農政局大崎農業水利事務所

目 次

序 文
例 言
調査要項
目 次

第 I 章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
第 II 章 調査に至る経緯と方法	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の方法と経過	4
第 III 章 発掘調査	6
1. 基本層序	6
2. 検出遺構と遺物	6
(1) 竪穴住居跡	6
(2) 掘立柱建物跡	10
(3) 溝跡	15
(4) 土坑	19
(5) その他の出土遺物	19
第 IV 章 総括	19
1. 竪穴住居跡	19
2. 掘立柱建物跡	19
3. 溝跡	20
4. まとめ	20

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

第 I 章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

館ノ山遺跡・館ノ山館跡は、美里町（旧南郷町）木間塚字古館に所在し、美里町役場南郷庁舎から北西へ約780m、標高約10mの鳴瀬川左岸の台地上に位置する（第1図）。宮城県遠田郡美里町（平成18年1月1日、旧小牛田町と旧南郷町が合併）は、仙台市から北東に約40km離れた県北中央部に位置し、地理的には江合川や鳴瀬川が流れる大崎平野東端部にある。

遺跡の位置する南郷地域は、北を篁岳丘陵、西を大松沢丘陵、東を旭山丘陵にそれぞれ囲まれており、篁岳丘陵に沿って東流する江合川と、大松沢丘陵の北～東縁に沿って東から南へと流れを変える鳴瀬川に挟まれた沖積地にある。鳴瀬川に沿って発達した自然堤防上に集落が形成されているほか、標高10～14mほどの台地が島状に存在している。

遺跡が立地する台地と鳴瀬川を挟んだ対岸には、大松沢丘陵の東端、大崎市（旧鹿島台町）小台館跡が立地する丘陵がある。明治時代以前は鳴瀬川が現在より東側を南流していたため、これらの対岸に位置する台地が一体となって東西500m、南北300mの小丘陵を形成していたと伝わる。その後、大正～昭和初期にかけて鳴瀬川改修により丘陵が大きく掘削され河道となり、一部が台地として残った。さらに台地の西半分が堤防の土台として利用され、東半分は旧南郷町水道事業所として開発された。なお、昭和38年に行われた貯水タンク掘削中に、それぞれ「建治三年」（1277）、「弘安四年」（1281）、「嘉元二年」（1304）、「延応四年」の年号を持つ板碑4基が発見され、現在は遺跡内の祠に安置されている。

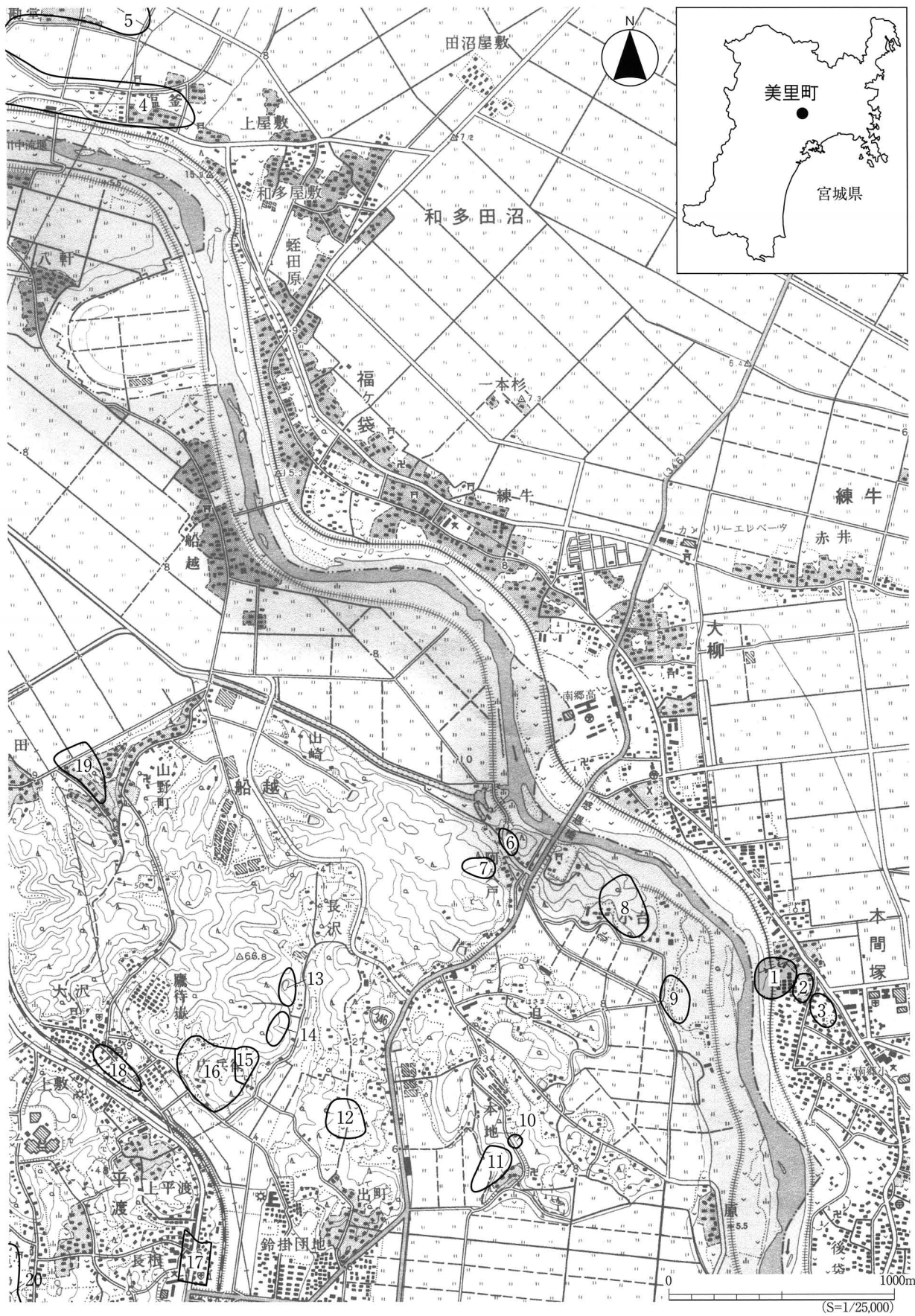
本遺跡は、「館ノ山遺跡」、「館ノ山館跡」の2つの名称でそれぞれ「古代の散布地」、「中世の城館跡」として登録されているが、これまでに本格的な発掘調査はなされていない。

2. 周辺の遺跡

館ノ山遺跡・館ノ山館跡が所在する南郷地域では、周知の遺跡は島状に残る台地上に点々と存在するのみであり、調査された遺跡も少なく遺跡の詳細については不明なものが多い。ただしその周辺には、西の大松沢丘陵上やその縁辺部、これより上流の鳴瀬川流域の自然堤防上に、縄文時代や古代、中世などの遺跡が比較的多く分布している（第1図、第1表）。

縄文時代の遺跡は、鳴瀬川を挟んで西の大松沢丘陵東縁部の南緩斜面に、前～中期の東要害貝塚（17）をはじめ、中～後期の鹿島遺跡（20）、晩期の上敷遺跡（18）がある。東要害貝塚では、一括性の高い前～中期土器群や前期前葉に位置付けられる岩偶、多くの動物遺体、さらには成人女性を埋葬した土壙墓などの貴重な資料が多数出土しており、当時の文化や食生活を知る上で非常に重要な遺跡として注目されている（大崎市教育委員会：2008）。

古代の遺跡は、本遺跡南東に隣接する台地上に神明社遺跡（2）、鳴瀬川上流の北東5.5kmの自然堤防上に小沼遺跡（5）、一本柳遺跡（4）があるほか、大松沢丘陵東縁部に長沢遺跡（13）、鷹待岳A・B遺跡（14・15）、南沢A・B遺跡（7・6）が近接して存在する。一本柳遺跡では、古代の規



第1図 館ノ山遺跡・館ノ山館跡の位置と周辺の遺跡

No	遺跡名	立地	種別	時代
1	館ノ山遺跡・館ノ山館跡	丘陵	集落、城館	古代、中世
2	神明社遺跡	丘陵	散布地	古代、中世
3	十王山遺跡	丘陵	城館	中世
4	一本柳遺跡	丘陵斜面	集落	奈良、平安、中世、近世
5	小沼遺跡・狐山遺跡	自然堤防	散布地	古代、中世
6	南沢B遺跡	丘陵麓	散布地	縄文、古代
7	南沢A遺跡	丘陵	散布地	古代
8	小屋館跡	丘陵	城館	中世
9	小台館跡	丘陵	城館	中世
10	新屋敷塚	丘陵	塚	中世、近世
11	古館跡	丘陵	城館	中世
12	西沢館跡	丘陵	城館	中世
13	長沢遺跡	丘陵麓	散布地	古代
14	鷹待岳A遺跡	丘陵麓	散布地	古代
15	鷹待岳B遺跡	丘陵麓	散布地	古代
16	平渡館跡	丘陵	城館	中世
17	東要害貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前期・中期
18	上敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文晩期
19	石川屋敷跡	丘陵	屋敷	近世
20	鹿島遺跡	丘陵	散布地	縄文中期

第1表 館ノ山遺跡・館ノ山館跡の周辺の遺跡

則的に配置された倉庫群と周溝状遺構・土坑群が検出され、一般集落ではなく在地有力者または富豪層の居宅を中心とした官衙的集落であると考えられている（宮城県教育委員会：1998・2001）。

中世の遺跡は、本遺跡の南東約320mに十王山遺跡（3）、鳴瀬川上流に一本柳遺跡、大松沢丘陵東縁部に小台館跡（9）、小屋館跡（8）、古館跡（11）、西沢館跡（12）、平渡館跡（16）などがある。十王山遺跡には樹齢750～800年と言われる榎の古木があり、古来より旅人の目印とされて貴重がられたと伝わる。また一本柳遺跡では、中世の大溝で区画された屋敷跡が多く検出されており、在地領主級の武士の屋敷があることが判明している（美里町教育委員会：2007）。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と方法

1. 調査に至る経緯

農林水産省東北農政局大崎農業水利事務所により、平成9年度からの国営鳴瀬川農業水利事業における鳴瀬川中流緊急対策特定区間事業で、取水施設の統合を目的とした鳴瀬川下流頭首工が新たに建設され、平成14年度より供用が開始された。これにより古館揚水機は廃止されることとなり、揚水機場と樋管の撤去および付帯する用水路の整備を目的とした、古館樋管撤去工事及び用水路敷設替工事が計画された。

工事予定地が古代の散布地および中世の館跡として周知される館ノ山遺跡・館ノ山館跡の範囲内であったことから、平成18年3月9日に東北農政局大崎農業水利事務所、東北地方整備局北上川下流河川事務所、宮城県教育委員会、美里町教育委員会が現地協議を行ったところ、古館樋管撤去工事によって遺跡に影響が及ぶ可能性が高いことが判明し、発掘調査が必要であるとの判断に至った。その後の調整で、工事予定箇所が河川法で規定される河川区域内であったことから、危険防止のため10月～6月の非出水期にしか掘削ができないこと、堤体を掘削することから仮設堤防の設置が必須であること

が判明した。

その後、調査期間等を把握するために遺跡の現状と遺構密度を早急に確認したほうが良いと判断し、大崎農業水利事務所、北上川下流河川事務所と協議した結果、堤体東側の丘陵状の高まり部分については、堤防本体に影響しない深度までの掘削に留めるとの条件のもと、先行して平成20年10月に確認調査を行うこととした。また、堤体直下部分及び堤体西側については、仮設堤防設置後の堤体開削工事に併せて平成20年12月に確認調査を行い、遺物・遺構が検出された際には直ちに事前調査へと移行することとした。

2. 調査の方法と経過

調査は、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、美里町教育委員会が主体となって行った。調査対象は、主に樋管撤去に伴い掘削を受ける範囲で、堤体直下部分については事前調査、また堤体東側部分については確認調査を行った（第2図）。

確認調査は、平成20年10月20・21日に実施した。堤体東側部分に調査区を4箇所（第2・3図、1T～4T）設定し、重機により表土および盛土を除去して地下状況を確認した。その結果、いずれの調査区においても、過去の河川工事による削平が地山まで及んでおり、遺構面が完全に破壊されていると判断した。

堤体直下およびその西側部分については、仮設堤防完成後の平成20年12月15日に着手したところ、堤体直下部分で住居跡や溝跡、多数の柱穴等およびそれに伴う遺物が確認された。一方、西側部分は過去の河川工事により大きく削平されており、遺構・遺物等は確認されなかった。以上の結果から、事前調査は堤体直下のみが対象となることがわかり、平成20年12月22日～平成21年1月23日に実施した。その結果、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡などが検出され、土師器や陶磁器などの遺物が出土した。遺構等の実測に際しては、平面図は電子平板を用いて作成し、堤防上に設置された測量杭を基準とした。世界測地系に基づく各基準点の座標値は以下の通りである。

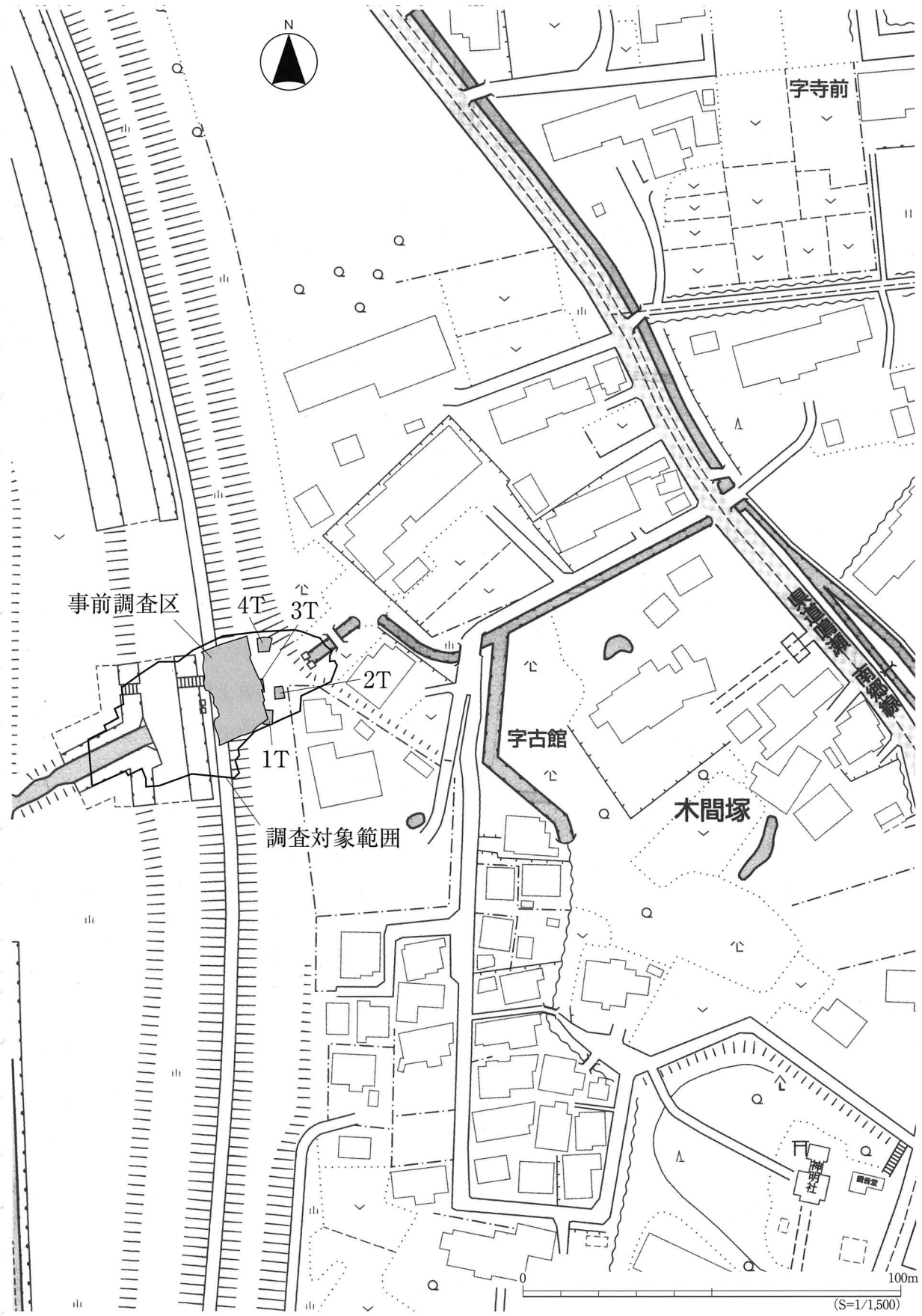
BM1 (16.297K) : X=-167435.051 Y=25633.909 Z=13.794

BM2 (16.337K) : X=-167395.353 Y=25629.021 Z=13.761

BM3 (16.317K) : X=-167415.174 Y=25631.718 Z=13.753

BM4 (16.3K) : X=-167432.269 Y=25632.093 Z=13.594

また、断面図は1/20で作成し、写真撮影による記録は、6×7cm判フィルム（モノクロ・カラーリバーサル）およびデジタルカメラ（1000万画素）を使用した。



第2図 調査区の位置

第三章 発掘調査

1. 基本層序

遺跡は標高約10mの台地（分離丘陵）上に所在し、その大半は削平を受けているものの、堤体直下のみに遺構が残っていた。そのため層序は調査区により若干の相違があるが、堤体直下およびその東側部分では概ね下記の通りである。

I a～d層：現表土（I a層）や堤防盛土（I b層）、旧表土（I c層）、旧盛土（I d層）である。I c・d層の層厚は事前調査区で約20cmある。

II層：にぶい黄褐色砂混じりシルト（漸移層）。事前調査区でのみ確認される。層厚10cm。遺構掘込面とみられる。

III層：明黄褐色砂混じり粘土質シルト。事前調査区および2Tで確認される。層厚は事前調査区で6cmある。事前調査区中央～北部における遺構確認面である。

IV a層：にぶい黄褐色シルト質粘土～砂。粘土主体の層と砂主体の層が互層となっている。層厚は2Tで25cmある。事前調査区南部では、本層の上面が遺構確認面である。

IV b層：褐灰色粘土質シルト。3Tでのみ確認される。

V層：褐灰色砂混じりシルト質粘土。1T～3Tで確認される。非常に固くしまり、基盤とみられる。本遺跡周辺は、大規模な河川工事により大幅な地形の改変を受けているが、原地形の残る堤体直下部分では旧地形が北西から南東にかけて緩やかに傾斜する。遺構掘込面の直上に堤防構築直前の旧表土や盛土が確認されることから、館跡廃絶後に東側の低い部分を中心に削平や盛土が行われ平坦化されたとみられる。

2. 検出遺構と遺物

竪穴住居跡1軒（SI2）、掘立柱建物跡6棟以上（SB5～10）、溝跡2条（SD1・SD4）、土坑1基（SK3）のほか多数の柱穴を検出した。住居跡や、建物を構成する柱穴のほとんどが調査区南部に集中し、この範囲の遺構密度は高い。一方で、中央から北部になると溝跡1条と柱穴が数個ある程度で、遺構密度は低くなる。

遺物は、土師器・須恵器、中世陶器、近世陶磁器、石鏃など、遺物収納用平箱で3箱程度出土した。以下、遺構ごとに記述する。

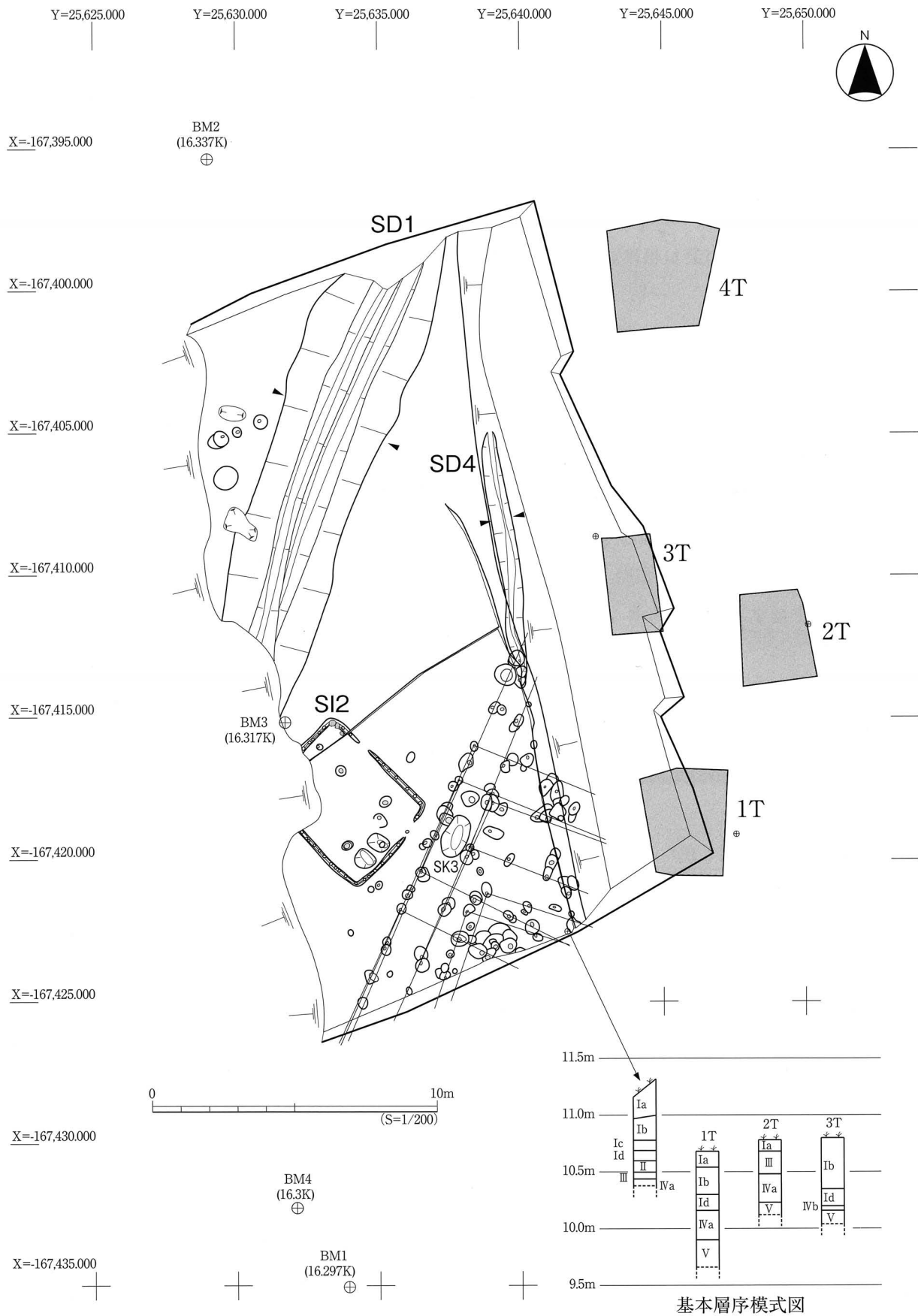
(1) 竪穴住居跡

1軒（SI2）検出した（第4図）。

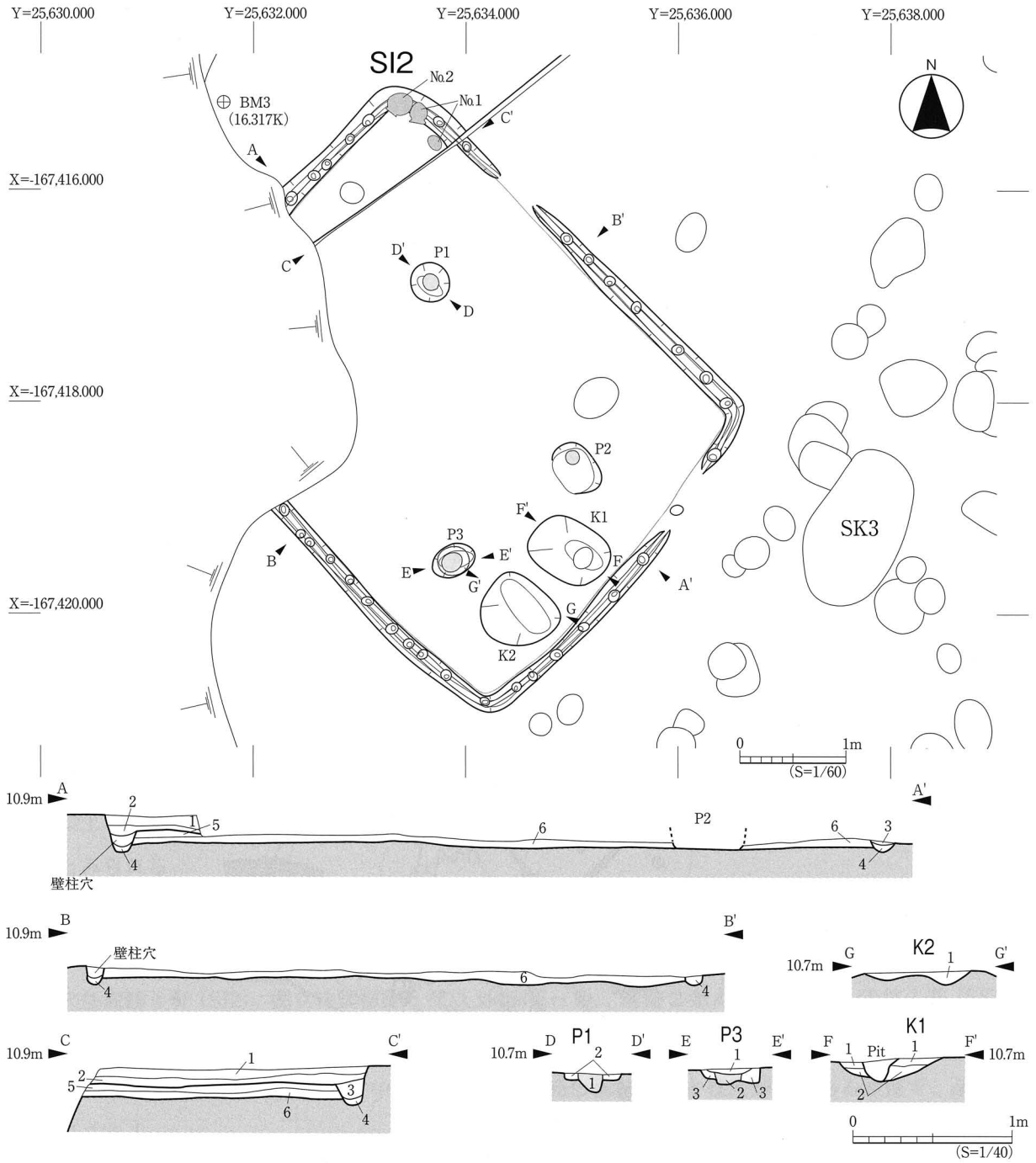
【SI2住居跡】

調査区南西部で検出した。過去の揚水機設置に伴う削平のため、北西部は失われていた。また、住居内も削平され、床は住居北側の約1/5程度のみ残存している。

[重複] Pit1～Pit3と重複し、これより古い。



第3図 遺構全体図および基本層序



	層	土色	土性	備考	層の性格
SI 2 (A-A') (B-B') (C-C')	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト		堆積土
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒~小ブロックを少し含む。炭粒を若干含む	堆積土
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを含む。焼土粒、炭粒を少し含む	堆積土
	4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山中ブロックを多く含む	周溝堀方埋土
	5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山中~大ブロックを多く含む	掘方埋土
	6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山大ブロックを多く含む	掘方埋土
壁柱穴		灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト		柱痕跡
	SI 2-P1 (D-D')	1 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱痕跡
	2 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土	
SI 2-P3 (E-E')	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを少し含む。炭粒を多く含む	柱抜取穴
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを少し含む	柱痕跡
	3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	柱穴埋土
SI 2-K1 (F-F')	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック、灰白粒を少し含む。焼土粒、炭粒を多く含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロックを含む。炭粒を少し含む	自然堆積
SI2-K2 (G-G')	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロック、灰白粒、焼土粒を少し含む。炭粒・炭化物を含む	自然堆積

第4図 SI2住居跡 平・断面図

[規模・平面形] 北東辺4.7m、南東辺3.9mで、平面形は長方形である。

[方向] 北東辺で見ると、北で40°西に偏する。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北西辺で床面から約10cmある。

[床面] 残存する部分では住居掘方埋土を床面としている。

[支柱穴] 支柱穴3個 (SI2-P1・P2・P3) を検出した。柱痕跡を3箇所、柱抜取穴を1箇所を確認した。支柱穴は長軸38~51cm、短軸30~38cmの円形や楕円形を呈し、深さは10~11cmある。柱穴掘方埋土は地山ブロックを含む暗褐色~灰黄褐色シルトを主体とする。柱痕跡は径14~20cm程の円形を呈し、堆積土は暗褐色~灰黄褐色シルトである。

[壁柱穴] 合計で34個検出した。壁柱穴はすべて周溝内にあり、削平されている西隅を除く各隅と、長辺に10個以上、短辺に8個以上配置されている。径10~15cm程の円形もしくは楕円形を呈する。

[周溝] 西隅部は不明であるが、住居の全周を巡るとみられる。残りの良い北側で上幅16~23cmある。壁柱を据えるために1/3程度埋め戻されている。その掘方底面までの深さは13cm程で、断面形はU字形を呈する。周溝掘方埋土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトである。埋め戻し後の深さは8cm程あり、堆積土は地山小ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで、焼土粒や炭化物粒を少量含む。

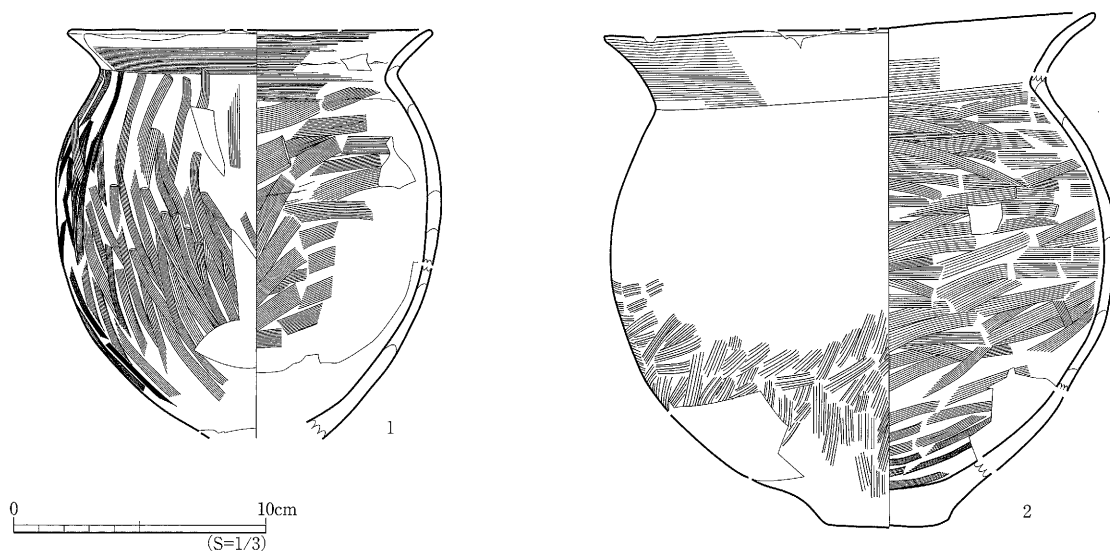
[貯蔵穴] 南隅部および南東辺付近で貯蔵穴とみられる土坑を2基 (SI2-K1・K2) 検出した。

K1は長軸75cm、短軸56cmの隅丸方形を呈し、深さが14cmある。断面形は皿状を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、焼土粒や炭化物粒を含む自然堆積土である。

K2は長軸72cm、短軸65cmの不整な方形で、深さが8cmある。断面形は皿状を呈するが、底面の凹凸が大きいの。堆積土は灰黄褐色シルトで、焼土粒や炭化物粒などを少量含む自然堆積土である。

[堆積土] 2層あり、上層は均質な灰黄褐色シルト、下層は地山小ブロックや炭化物粒をわずかに含む灰黄褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 北隅部の床面および周溝堆積土から土師器甕が出土している (第5図)。1は頸部が「く」



No	器種	遺構/層	残存	法量 (cm)			特徴	写真 図版	登録
				口径	底径	器高			
1	土師器 甕	SI2 床	1/2	14.4	-	(16.2)	外面: [口] ヨコナデ [胴] ヘラナデ 内面: [口] ヨコナデ [胴] ヘラナデ	7-5	12
2	土師器 甕	SI2周溝/堆積土	3/4	19.5	3.5	19.8	外面: [口] ヨコナデ [胴] ハケメ (→ケズリ) [底] ナデ 内面: [口] ヨコナデ [胴] ヘラナデ	7-6	11

第5図 SI2住居跡 出土遺物

字状に屈曲して、口縁部が外傾して立ち上がる。胴部は最大径がほぼ中央にあり、やや縦長である。器面調整として縦方向のヘラナデが用いられる。その単位は縦に長く、その幅は細いのが特徴である。2は頸部が「く」字状に屈曲して、口縁が短く外反して立ち上がる。底部は平底、胴部は最大径がほぼ中央にある球形で、1に比べて底部付近の屈曲が強く胴部がより膨らむ。器面調整として胴部下半にハケメが用いられる。他にはK2堆積土や住居掘方埋土などから土師器がわずかに出土しているが、いずれも小破片で、図示できるものはなかった。

(2) 掘立柱建物跡

調査区南部で多数の柱穴を検出したが、これらのうち、柱筋の通りがよく、柱穴相互の間隔に規則性を見出すことができたもの6棟（SB5～SB10）について記述する。（第6・7図）

【SB5A・B建物跡】

[構造] 調査区南東部で検出した。建て替えが一度認められ（A→B）、B建物はA建物よりやや南側に位置をずらして建てられている。桁行4間以上、梁行2間以上の南北棟とみられ、南東部が調査区外に延びる。A建物は西側に、B建物は西側と北側に廂または縁をもつ。

[重複] 他の建物跡すべてと重複し、A・BともにSB9建物跡より古い。その他の建物跡との直接の新旧関係は不明である。

〈SB5A建物跡〉

[規模] 検出長は、桁行総長が西側柱列で6.3m以上、柱間寸法が北から2.2m・2m・2.1mである。梁行総長は北妻で1.8m以上、柱間寸法は1.8m、廂の出は西で1.3～1.4mである。

[柱穴] 身舎で5個、廂で4個検出し、すべてで柱痕跡を確認した。掘方は、身舎が径32～85cmの円形や不整な円形を呈し、深さ約14～42cm、廂が径28～35cmの楕円形や不整な円形を呈し、深さ約9～17cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は、身舎が径9～15cmの円形で、廂が径7～10cmの円形である。堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列で見ると北で24°東に偏る。

[出土遺物] なし。

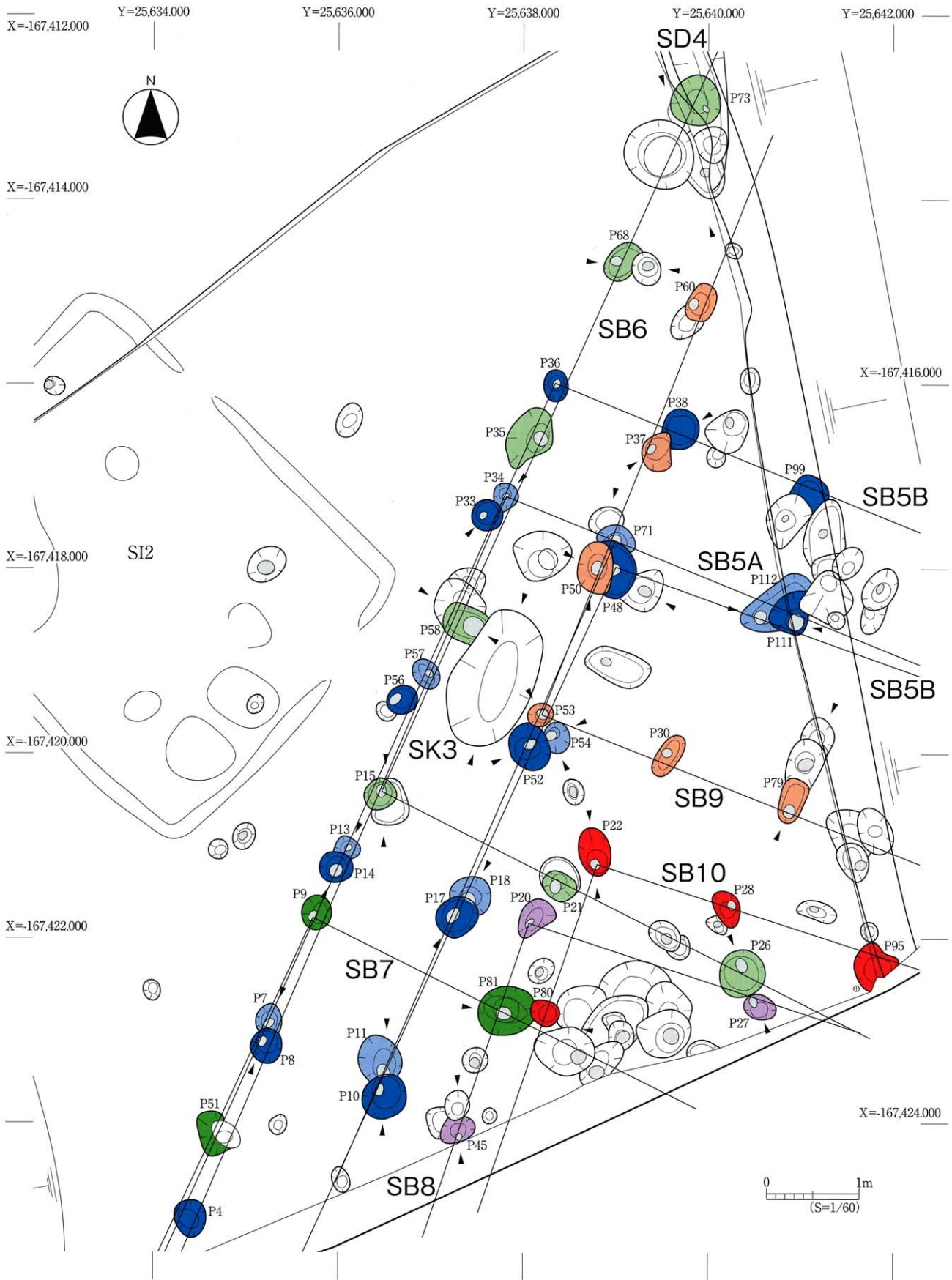
〈SB5B建物跡〉

[規模] 検出長は、桁行総長が西側柱列で6.2m以上、柱間寸法が北から2.1m・2m・2.1m、廂の出が西で1.4～1.5mある。梁行総長は北妻で2.1m以上、柱間寸法は2.1m、庇の出は北で1.4～1.7mである。

[柱穴] 身舎で5個、廂で8個検出し、身舎がすべて、廂が5箇所柱痕跡を確認した。掘方は、身舎が径46～61cmの円形や不整な円形を呈し、深さ22～43cm、廂が径33～44cmの円形や不整な円形を呈し、深さは約4～27cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は、身舎が径10～17cmの円形で、廂が径12～20cmの円形である。堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

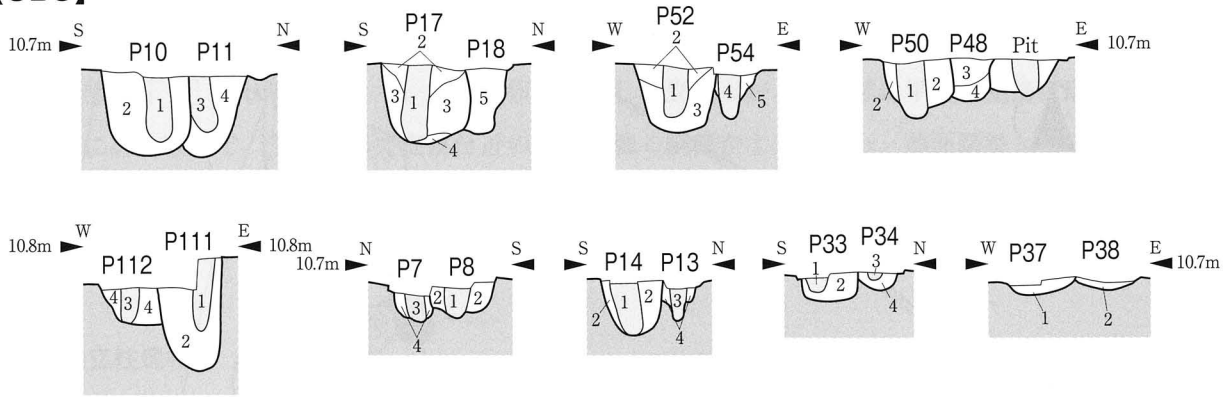
[方向] 西側柱列で見ると北で25°東に偏る。

[出土遺物] Pit8掘方埋土から土師器小片、Pit10柱痕跡から須恵器坏が出土している。

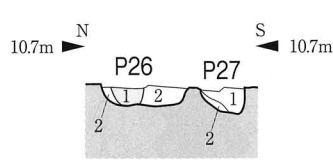
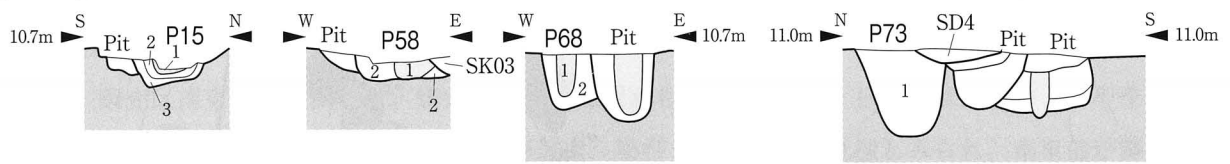


第6図 SB5~SB10建物跡・SK3土坑 平面図

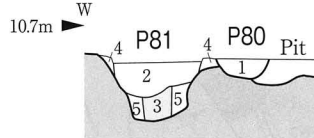
【SB5】



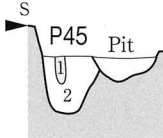
【SB6】



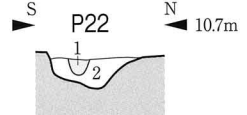
【SB7】



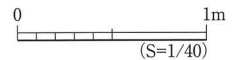
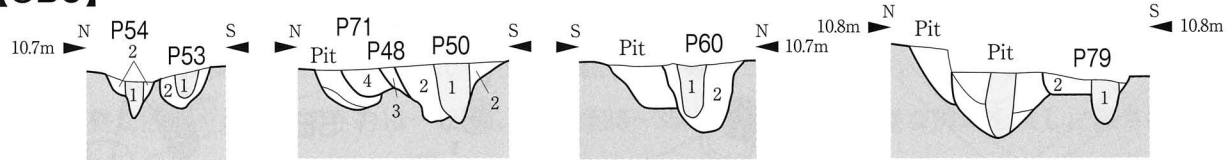
【SB8】



【SB10】



【SB9】



遺構	層	土色	土性	備考	層の性格	
P10	SB5B	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを含む。炭粒を少し含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小～中ブロックを多く含む	柱穴埋土
P11	SB5A	3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	地山粒・ブロックを含む	柱痕跡
		4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む。炭粒を少し含む	柱穴埋土
P17	SB5B	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを含む。焼土粒、炭粒を若干含む	柱痕跡
		2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。炭化物を若干含む	柱穴埋土
		3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	柱穴埋土
		4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
P18	SB5A	5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
P52	SB5B	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒を含む	柱痕跡
		2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
		3	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	地山ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
P54	SB5A	4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を含む	柱痕跡
		5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
P50	SB9	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒、炭化物を含む	柱痕跡
		2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
P48	SB5B	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
		4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
P111	SB5B	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒、炭粒を少し含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
P112	SB5A	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。炭粒を少し含む	柱穴埋土
		4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒・小～中ブロック、炭粒を含む	柱穴埋土

第7図 SB5～10建物跡 断面図

遺構	層	土色	土性	備考	層の性格	
P8	SB5B	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒・小ブロック、炭粒を少し含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山小～大ブロックを多く含む	柱穴埋土
P7	SB5A	3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡
		4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	柱穴埋土
P14	SB5B	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを若干含む。炭粒を少し含む	柱痕跡
		2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む。炭粒を少し含む	柱穴埋土
P13	SB5A	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を若干含む	柱痕跡
		4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を少し含む	柱穴埋土
P33	SB5B	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小～中ブロックを含む。炭粒を若干含む	柱痕跡
		2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小～中ブロックを含む	柱穴埋土
P34	SB5A	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱痕跡
		4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを含む	柱穴埋土
P37	SB9	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	柱穴埋土
P38	SB5B	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	柱穴埋土
P15	SB6	1	黒色 (10YR2/1)	シルト	地山粒を少し含む。炭粒を若干含む	柱痕跡
		2	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	シルト	均質な層	柱穴埋土
		3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。炭粒を若干含む	柱穴埋土
P58	SB6	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱痕跡
		2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロックがほとんどを占める	柱穴埋土
P68	SB6	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む	柱痕跡
		2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒を非常に多く含む	柱穴埋土
P73	SB6	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
P26	SB6	1	黒色 (10YR2/1)	シルト	地山小ブロックを含む。炭粒を少し含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山中ブロックを多く含む。炭粒を若干含む	柱穴埋土
P27	SB8	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒・小ブロックを少し含む	柱抜取穴
		2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を非常に多く含む	柱穴埋土
P80	SB10	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山小～大ブロックを多く含む。炭粒を少し含む	柱穴埋土
		2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山中ブロックを含む	柱抜取穴
P81	SB7	3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山小～中ブロックを少し含む	柱痕跡
		4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山小～中ブロックを多く含む。炭粒を少し含む	柱穴埋土
		5	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山小～大ブロックを多く含む	柱穴埋土
P45	SB8	1	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を多く含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小～中ブロックを多く含む	柱穴埋土
P22	SB10	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	均質な層	柱痕跡
		2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小～中ブロックを多く含む	柱穴埋土
P54	SB5A	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を含む	柱痕跡
		2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
P53	SB9	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	柱穴埋土
P50	SB9	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒、炭化物を含む	柱痕跡
		2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
P48	SB5B	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
P71	SB5A	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山中ブロックを多く含む	柱穴埋土
P60	SB9	1	黒褐色 (10YR5/1)	粘土質シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡
		2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒を多く含む。地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
P79	SB9	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	柱痕跡
		2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山ブロック主体	柱穴埋土

【SB6建物跡】

[構造] 桁行4間以上、梁行3間以上の南北棟とみられ、北東部が調査区外に延びる。

[重複] SB5A・B、SB8～10建物跡と重複するが、直接の新旧関係は不明である。またSK3土坑、SD4溝跡と重複し、これらより古い。

[規模] 検出長は、桁行総長が西側柱列で8.2m以上、柱間寸法が南から2.0m・2.2m・2.1m・1.9mある。梁行総長は南妻で4.3m以上、柱間寸法は西から2.2m、2.2mである。

[柱穴] 7個検出し、すべてで柱痕跡を確認した。掘方は径34～55cmの円形や長軸38～71cm、短軸29～47cmの隅丸方形を呈し、深さは約8～46cmある。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。柱痕跡は径12～20cmの円形で、堆積土は黒色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列でみると北で24°東に偏る。

[出土遺物] なし。

【SB7建物跡】

[構造] 南北1間以上、東西1間以上の建物跡と推定される。南東部が調査区外へ延びるため棟方向は不明である。

[重複] SB5A・B、SB8、SB10建物跡と重複し、SB10建物跡より古い。他の建物跡との直接の新旧関係は不明である。

[規模] 検出長は、西側柱列で推定2.6m以上、柱間寸法が推定2.6mある。北側柱列では総長2.3m以上、柱間寸法は2.3mである。

[柱穴] 3個検出し、2箇所で柱痕跡、また2箇所で柱抜取穴を確認した。掘方は径36～63cmの円形や不整な円形を呈し、深さは約31cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は径約11～17cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列で見ると北で25°東に偏る。

[出土遺物] なし。

【SB8建物跡】

[構造] 南北1間以上、東西1間以上の建物跡と推定される。南東部が調査区外へ延びるため棟方向は不明である。

[重複] SB5A・B、SB6、SB7、SB10建物跡と重複するが、直接の新旧関係は不明である。

[規模] 検出長は、西側柱列で総長2.4m以上、柱間寸法が2.4mある。北側柱列では総長2.6m以上、柱間寸法は2.6mである。

[柱穴] 3個検出し、すべてで柱痕跡を確認した。掘方は径35～45cmの不整な円形を呈し、深さは約12～30cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は径9～10cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列で見ると北で21°東に偏る。

[出土遺物] Pit20堆積土から土師器小片が出土している。

【SB9建物跡】

[構造] 桁行3間以上、梁行2間以上の南北棟とみられ、北東部が調査区外に延びる。

[重複] SB5A・B、SB6建物跡と重複し、SB5B建物跡より新しい。SB6建物跡との直接の新旧関係は不明である。

[規模] 検出長は、桁行総長が西側柱列で4.7m以上、柱間寸法が南から1.7m・1.4m・1.6mある。梁行総長は南妻で2.9m以上、柱間寸法は西から1.4m・1.5mである。

[柱穴] 6個確認し、すべてで柱痕跡を確認した。掘方は長軸30～55cm、短軸24～36cmの楕円形や不整な円形を呈し、深さは4～36cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は径9～14cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列で見ると北で22°東に偏る。

[出土遺物] Pit53掘方埋土から土師器小片が出土している。

【SB10建物跡】

[構造] 南北2間以上、東西2間以上の建物跡で、南東部が調査区外へ延びるため棟方向は不明である。

[重複] SB5A・B、SB6～8建物跡と重複し、SB7建物跡より新しい。他の建物跡との直接の新旧関係は不明である。

[規模] 検出長は、西側柱列で推定1.7m以上、柱間寸法が推定1.7mある。北側柱列では推定3.2m以上、柱間寸法は西から1.5m・推定1.7mである。

[柱穴] 4個検出し、2箇所柱痕跡を確認した。掘方は長軸34～55cm、短軸28～47cmの楕円形や不整な円形を呈し、深さは約15～18cmある。埋土は黒褐色シルトを基調とする。柱痕跡は径11cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトを基調とする。

[方向] 西側柱列で見ると北で19°東に偏る。

[出土遺物] なし。

(3) 溝跡

調査区北部で1条（SD1A・B）、調査区中央東側で1条（SD4）を検出した。（第3・8図）

【SD1A・B溝跡】

調査区北部で検出した。掘り直しが1度認められ（A→B）、B溝跡はA溝跡より底面で約0.7m西側に位置をずらして、約0.4m深く掘削されている。

〈SD1A溝跡〉

[方向] 北東から南西方向へ延び、北で約22°東に偏る。北側は調査区外へ延び、南側はSD1B溝跡により壊されている。

[規模・断面形] 検出長は14.4mで、上幅が1.3m以上、下幅が0.2～0.4m、深さが現況で約1.0mある。壁は底面から0.4mの高さまで急に立ち上がり段が付き、この段から緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。

[堆積土] 8層に分けられ、下位が黒褐色粘土質シルト、中位が灰黄褐色シルト、上位が黒褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

[出土遺物] 砥石（図版8-5-7）と土師器小片が出土している。

〈SD1B溝跡〉

[方向] 北東から南西方向へ延び、北で約22°東に偏る。北側は調査区外へ延び、南側は揚水機設置に伴う工事により失われている。

[規模・断面形] 検出長は18mで、上幅が3.3～4.2m、下幅が0.2～0.3m、深さが約1.4mある。壁は、底面から0.7～0.8m程の高さまで急に立ち上がり段が付き、この段から緩やかに立ち上がる。断面形はV字形を呈する。

[堆積土] 上下2層に大別される。下層は8層に分けられ、下位が黒褐色や褐灰色粘土質シルト、上位が地山ブロックを多く含む灰黄褐色砂質シルトを主体とする自然堆積土である。上層は4層に分けられ、黒褐色シルトが自然堆積している。

[出土遺物] 下層から陶器甕（第9図2）、砥石、土師器小片が出土した。上層からは、陶器皿（瀬戸美濃・唐津）・甕（常滑）、磁器碗、須恵器甕、瓦質土器播鉢、石臼、砥石などの小片が出土している（第9図1、3～7）。

【SD4溝跡】

調査区中央部東側で検出した。過去の河川工事により遺構の大部分は失われており、底面付近がわずかに残存していた。

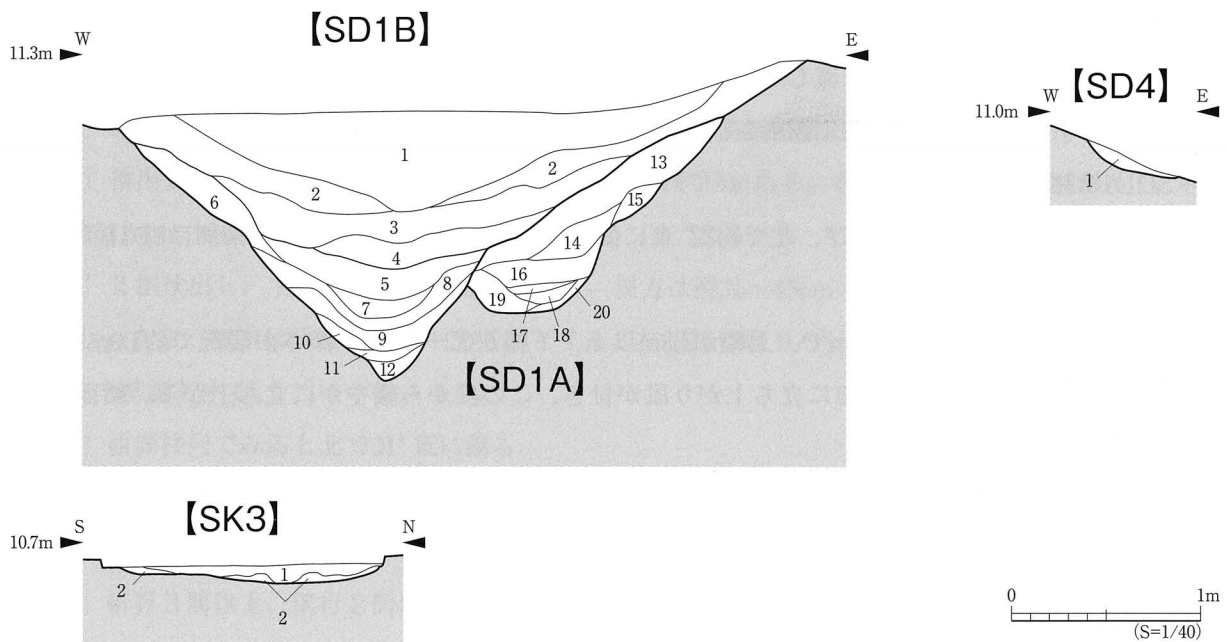
[重複] SB6建物跡と重複し、これより新しい（第6・7図）。

[方向] 北から南へ延び、北で約7°西に偏る。

[規模・断面形] 検出長は9.1mで、上幅0.5~0.7m、下幅0.1~0.3m、深さが0.1mある。断面形は皿状を呈する。

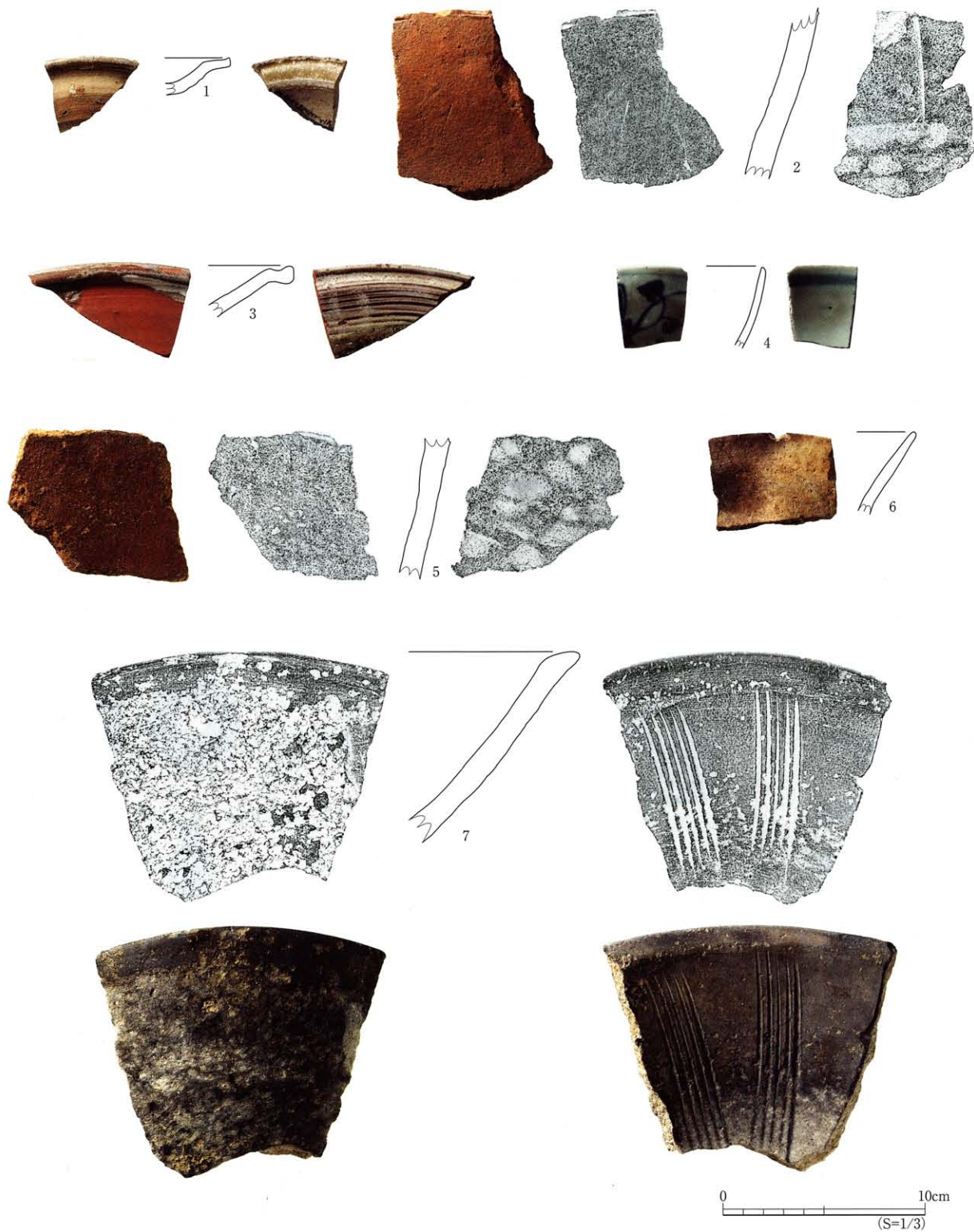
[堆積土] 1層のみで、黒褐色シルトが自然堆積している。

[出土遺物] 土師器小片が出土しているが、図示できるものはなかった。



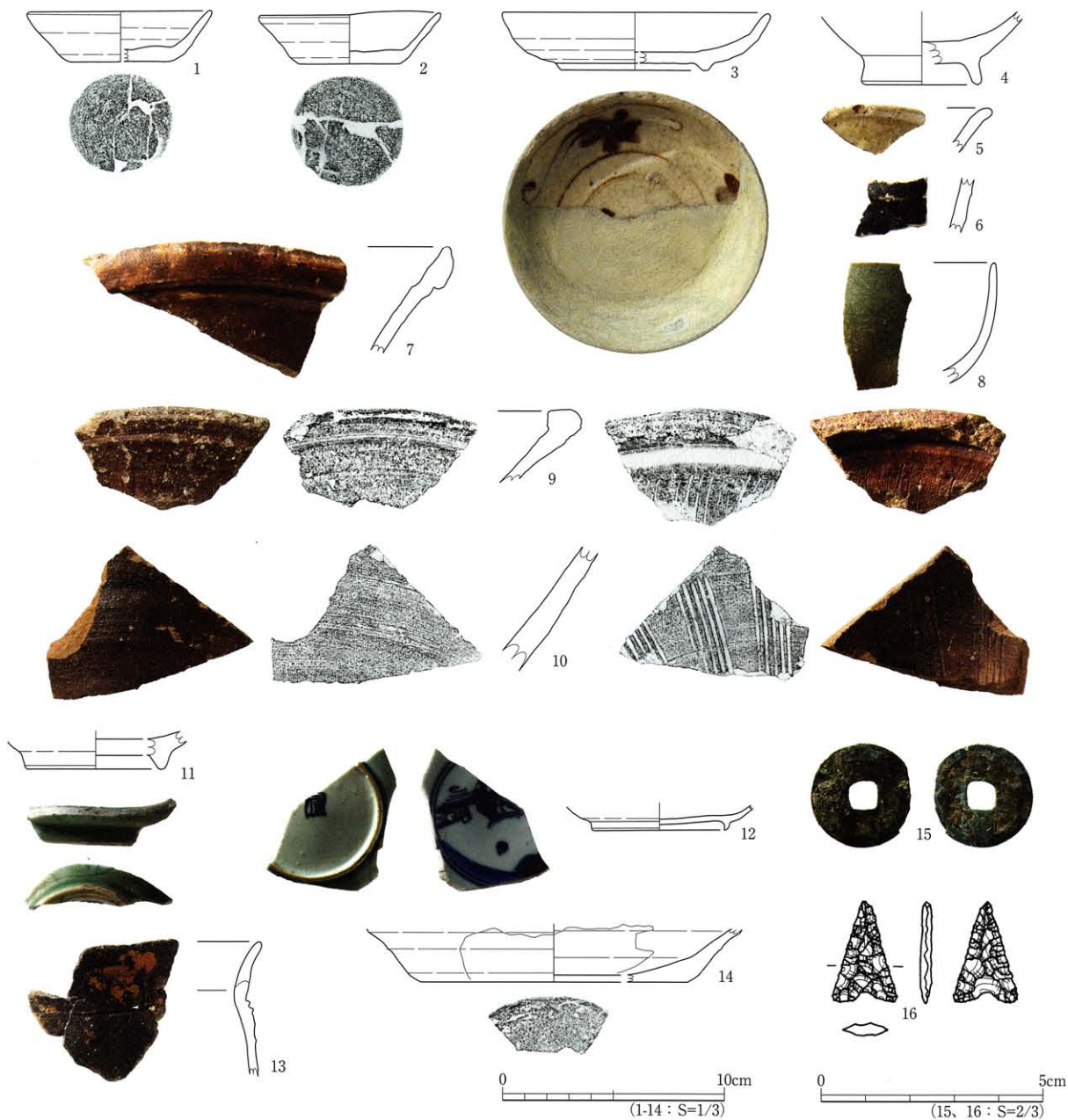
遺構	層	土色	土性	備考	層の性格
SD1B	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を少し含む。炭粒を若干含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒・小ブロックを少し含む	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒、炭粒を含む	自然堆積
	5	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	地山中ブロックを多く含む	自然堆積
	6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	地山崩落土
	7	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	地山中ブロックを含む。炭粒を少し含む	自然堆積
	8	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	地山粒を含む。炭粒を少し含む	自然堆積
	9	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	地山粒を含む。炭粒を少し含む	自然堆積
	10	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	均質な層	自然堆積
	11	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	砂ブロックを含む。炭粒を若干含む	自然堆積
	12	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒を少し含む	自然堆積
SD1A	13	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒、炭粒を少し含む	自然堆積
	14	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山大ブロック、焼土粒を若干含む。炭粒を含む	自然堆積
	15	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山大ブロックを含む。炭粒を若干含む	自然堆積
	16	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒、炭粒を少し含む	地山崩落土
	17	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒を含む	自然堆積
	18	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒を若干含む	自然堆積
	19	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒を含む。炭粒を少し含む	自然堆積
	20	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	粘土質シルト	黒色土粒を含む	自然堆積
SD4	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山大ブロックを若干含む	自然堆積
SK3	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む。炭粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	自然堆積

第8図 SD1・4溝跡・SK3土坑 断面図



No.	遺構・層	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SD1 堆積土	陶器	皿	瀬戸美濃	口縁に施釉（灰釉）、16c頃	8-5-1	1
2	SD1 下層	陶器	甕	在地	焼成不良、沈線、内面：オサエ、外面：ナデ	8-5-6	8
3	SD1 堆積土	陶器	皿	唐津		8-5-2	2
4	SD1 堆積土	磁器	碗	明	染付	8-5-4	3
5	SD1 堆積土	陶器	甕	常滑	外面：施釉（鉄釉）、沈線	8-5-3	4
6	SD1 堆積土	須恵器	甕	—		-	5
7	SD1 堆積土	瓦質土器	播鉢	—	内面：卸目	8-5-5	6

第9図 SD1溝跡 出土遺物



No	遺構・層	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	遺構確認面	土師質土器	灯明皿	—	口径8.3cm、底径4.6cm、器高2.3cm、残存：ほぼ完形 内外：ロクロナデ、底：回転糸切り→マメツ、内面底部に油煙痕カ	8-1	15
2	遺構確認面	土師質土器	灯明皿	—	口径8.2cm、底径4.6cm、器高2.2cm、残存：ほぼ完形 内外：ロクロナデ、底：回転糸切り→マメツ	8-2	16
3	遺構確認面	陶器	小皿	美濃	残存1/2、口径(12)cm、高台(6.6)cm、器高2.6cm、重ね焼き痕跡 外面：回転ケズリ→施釉、内面：弁柄文(鉄釉)→施釉	8-3・4	25
4	遺構確認面	陶器	碗	美濃	高台径(5.0)cm	8-5-9	19
5	遺構確認面	陶器	皿	美濃		8-5-13	29
6	遺構確認面	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃		8-5-15	27
7	遺構確認面	陶器	鉢	東海	口縁折込、施釉(鉄釉)	8-5-11	26
8	遺構確認面	陶器	碗	—		-	20
9	遺構確認面	陶器	播鉢	—	内面：卸目	8-5-8	17
10	遺構確認面	陶器	播鉢	常滑	施釉(鉄釉)、内面：卸目	8-5-14	22
11	遺構確認面	青磁	碗	龍泉窯系	高台径(6.2)cm 鎊蓮弁文	8-5-12	28
12	遺構確認面	磁器	小皿	明	染付、高台径(5.8)cm	8-5-10	21
13	P103柱抜取穴	土師器	壺	—	沈線	8-5-17	13
14	P109掘方埋土	須恵器	杯	—	底(12)cm、焼成不良	8-5-16	30
15	遺構確認面	銅銭	—	—	径2.4cm	-	14
16	遺構確認面	石器	石鏃	—	珪質頁岩製 長2.3cm、幅1.4cm、厚0.2cm	8-5-18	24

第10図 その他の出土遺物

(4) 土坑

調査区南部で土坑1基を検出した。(第6・8図)

【SK3土坑】

[重複] SB5A・B、SB6建物跡と重複し、これらより新しい。

[規模・平面形・断面形] 長軸152cm、短軸89cmの楕円形で、深さが10cmある。断面形は皿状を呈する。

[堆積土] 2層に分けられ、地山ブロックや炭化物を含む暗褐色シルトが自然堆積している。

[出土遺物] 土師器小片が出土しているが、図示できるものはなかった。

(5) その他の出土遺物

遺構確認面や表土から遺物が多く出土しているが、その多くが破片である。土師器壺や陶器小皿・鉢・碗・甕(美濃・東海・在地ほか)、青磁鎬蓮弁文碗(龍泉窯系)、中世以降の灯明皿、石鏃、時期不明の銅銭などがある(第10図)。

第IV章 総括

今回の調査では、竪穴住居跡1軒(SI2)、掘立柱建物跡6棟以上(SB5~10)、溝跡2条(SD1・SD4)、土坑1基(SK3)のほか多数の柱穴を検出した。以下、主要な遺構について年代や性格を検討する。

1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は1軒(SI2)のみの検出である。遺物は北隅付近の床面と周溝堆積土から土師器甕が2個体まとまって出土した。2点とも器形や器面調整などから、古墳時代前期塩釜式期から南小泉式期の古い段階で見られる甕に類似しており(氏家:1957、宮城県教育委員会:1985、辻:1995)、古墳時代前期、塩釜式期の住居跡とみられる。

なお、本住居ではカマドは検出されなかった。東北地方南部ではカマドの出現が古墳時代中期ころと考えられている(宮本:1989、古川・白鳥:1991など)ことから、もともと存在しなかった可能性が大きい。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は6棟(SB5~SB10)確認した。建物跡は重複が最大で4棟確認されるほか、調査区南辺でほぼ同位置に柱穴が11個重複している箇所も確認されることから、建て替えが何度も行われていたと推定される。

これらの建物群は、西側柱列の方向から、①:北で24~25°東に偏るもの(SB5A・B、SB6、SB7)、②北で20°前後東に偏るもの(SB8、SB9、SB10)の2つに分類でき、建物の位置もあわせて考えると、

SB6とSB7の組み合わせ、また、SB9とSB8もしくはSB10の組み合わせでそれぞれ同時に存在していた可能性が考えられる。これらは、建物跡の新旧関係から①→②の変遷となる。ここで、各建物跡の柱間寸法を検討すると、a：柱間寸法が2.0m前後のもの（SB5A・B、SB6）、b：2.3～2.5mのもの（SB7、SB8）、c：1.5m前後のもの（SB9・SB10）の3つに分類が可能である。建物跡の新旧関係と建物方向から検討すると、a→b→cという変遷となる。以上から、建物跡の変遷は、古いほうから第1段階：SB5A→SB5B、第2段階：SB6・SB7、第3段階：SB9・SB8→SB10という3段階が考えられる。

3. 溝跡

溝跡は2条（SD1A・B、SD4）検出した。SD1溝跡は改修が1度認められ、底面で西側に位置をずらして掘り直されている。SD1B溝跡の堆積土下層から中世陶器、堆積土上層から16世紀頃とみられる陶器が出土し、下層から近世以降の遺物の出土は認められないことや、断面形がV字形を呈することから中世の堀跡とみられ、館跡に伴う可能性がある。またSD1A・B溝跡と調査区南部の建物群はそれぞれの方向がほぼ平行することから、SD1A・B溝跡は南側の建物群とほぼ同時期のものとみられる。これらは中世頃に営まれた屋敷跡の一部と考えられる。

一方で、SD4溝跡は建物群や堀跡と方向が揃っていないことから、直接関係するものとはみられず、建物跡との重複関係から、これらの遺構より新しい時期のものと考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、中世の館跡に伴う建物群、堀跡を検出した。このうち、建物群については3段階、堀跡については2段階の変遷がみられ、中世以降繰り返し営まれた屋敷跡の一部と考えられる。これらは、北東もしくは南東へ延びることが想定されるため、屋敷跡の中心は調査地点より東にあり、遺跡は東へ広がることが推定される。なお、SD1A・B堀跡より西側については、過去の河川工事で大幅に削平されているが、明治期以前は遺跡の立地する台地が対岸の丘陵とかつて一体であったことを考慮に入ると、本来は西側にも遺跡が広がっていた可能性がある。

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 pp.1-14
- 大崎市教育委員会 2008 『東要害貝塚』宮城県大崎市文化財調査報告書第3集
- 紫桃正隆 1973 『史料 仙台領内古城・館』第3巻
- 辻 秀人 1995 「東北部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史学 地理学』第27号
pp. 39-88
- 古川一明・白鳥良一 1991 「8 東北」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣 pp. 108-120
- 美里町教育委員会 2007 『一本柳遺跡』美里町文化財調査報告書第2集
- 宮城県教育委員会 1985 「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 宮城県教育委員会 1998 『一本柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第178集
- 宮城県教育委員会 2001 『一本柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第185集
- 宮本長二郎 1989 「古墳時代堅穴住居論」『研究論集』Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報第47冊 奈良国立文化財研究所 pp. 200-232

写 真 图 版



1. 館ノ山遺跡・館ノ山館跡の空中写真（上が北）

国土交通省：国土画像情報（オルソ化空中写真）
縮尺：約1/15,000



2. 遺跡遠景（北から）

図版1



1. 調査区全景（南から）



2. S12住居跡（北から）

図版2



1. SI2住居跡P1（北東から）



2. SI2住居跡P3（南から）



3. SI2住居跡K1（北東から）



4. SI2住居跡K2（北東から）



5. SI2住居跡掘方埋土断面（南東から）



6. SI2住居跡断面（南東から）



7. SI2住居跡周溝断面（西から）



8. SI2住居跡土師器壺出土状況（北から）

図版3



1. 掘立柱建物跡群全景 (南西から)



2. SB5B-P14、SB5A-P13 (南東から)



3. SB9-P37、SB5B-P38 (南東から)



4. SB5B-P52、SB5A-P54 (南から)



5. SB5A-P71、SB5B-P48、SB9-P50 (西から)

図版4



1. SB5B-P10、SB5A-P11 (東から)



2. SB6-P15 (東から)



3. SB6-P73、SD4溝跡 (西から)



4. SB6-P68 (南から)



5. SB6-P26、SB8-P27 (南西から)



6. SB7-P81、SB8-P80 (南から)



7. SB8-P45 (東から)



8. SB10-P22 (東から)

図版5



1. SD1B溝跡



2. SD1A溝跡



3. SD1A・B溝跡断面

図版6



1. SD4溝跡 (南から)



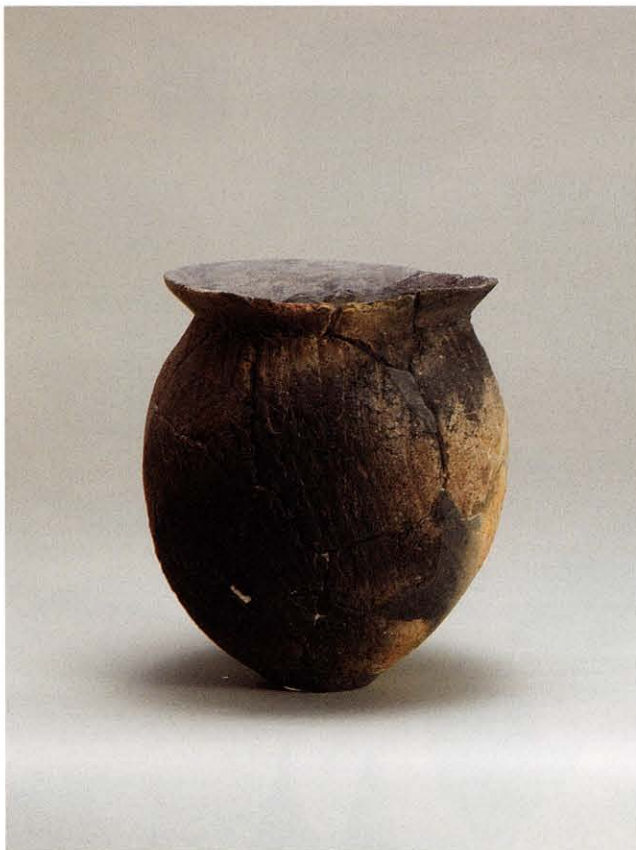
2. SK3土坑 (東から)



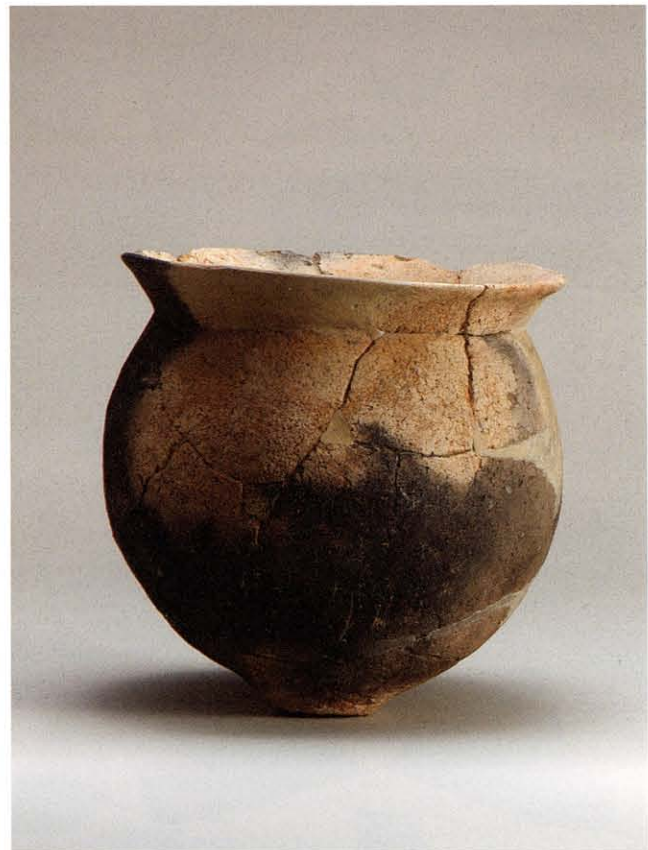
3. 事前調査区基本層序観察用断面 (北から)



4. 2T基本層序観察用断面 (西から)



5. SI2住居跡床面出土土師器甕 (第5図1)



6. SI2周溝堆積土出土土師器甕 (第5図2)

図版7



1. 遺構確認面出土灯明皿 (第10図1)



2. 遺構確認面出土灯明皿 (第10図2)



3. 遺構確認面出土陶器小皿 (第10図3)



4. 遺構確認面出土陶器小皿 (第10図3)



5. SD1A・B溝跡、遺構確認面出土遺物

図版8

1~7 SD1A・B
 8~18 遺構確認面
 1~17: S=1/3
 18: S=2/3

報告書抄録

ふりがな	たてのやまいせき・たてのやまたてあと							
書名	館ノ山遺跡・館ノ山館跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	美里町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
著者名	岩渕 竜也・小野 章太郎							
編集機関	美里町教育委員会							
所在地	〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13 TEL 0229-33-2175							
発行年月日	西暦2010年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たてのやまいせき 館ノ山遺跡 たてのやまたてあと 館ノ山館跡	みやぎけんとおだぐん 宮城県遠田郡 みさとまちきまづか 美里町木間塚 あざふるだて 字古館	045055	40003	31度	129度	2008.10.20~10.21	43㎡	国営鳴瀬
			40005	29分	46分	2008.12.22 ~2009.1.23	350㎡	川農業水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館ノ山遺跡 館ノ山館跡	集落跡 屋敷跡	古墳前期 中世 近世	堅穴住居跡1 掘立柱建物跡6 堀跡1 溝跡1 土坑1 ピット		土師器 中世陶器 近世陶磁器 砥石			
要約	<p>館ノ山遺跡・館ノ山館跡は宮城県北部の美里町木間塚地区に所在し、鳴瀬川の河川工事により分離された丘陵の東端、標高10mの台地上にある。国営鳴瀬川農業水利事業に伴い発掘調査を行った結果、古墳時代前期の堅穴住居跡や、中世～近世の掘立柱建物跡、堀跡、溝跡、土坑などを検出した。これらのうち、掘立柱建物跡と堀跡は同時期に機能していたとみられ、屋敷跡の一部と考えられる。</p>							

美里町文化財調査報告書第6集

館ノ山遺跡
館ノ山館跡

平成22年3月15日印刷

平成22年3月19日発行

発行 美里町教育委員会
宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
